棚田学会通信

第66号 目次　2022年2月8日発行

棚田が好きな人が集うカフェを目指して・・・・・・・・ 2
小さな積み重ねから育む棚田の情景・・・・・・・・・・ 3
上堰棚田をボランティアとともに守る・・・・・・・・・ 3
忘れられた北山の棚田で暮らす・・・・・・・・・・・・ 4
棚田と人を繋ぐ「棚田アイス」・・・・・・・・・・・・ 6
2021年棚田学会発表会報告 ・・・・・・・・・・・・・ 7
事務局ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

右：井仁の棚田
　　カフェ内観

下：地元高校生と共に山間
　　部で生きる力を学ぶ
　　（江田の棚田）

復田され棚田オーナーを実施する石上峠地区（上堰棚田）

北山の
棚田空撮

葉山の棚田米を使った葉山アイス

今回は、それぞれの棚田に惚れ込んで移り住み、棚田等の保全活動に取り組んでいる方々の特集である。移住者が棚田での営農活動そのものを担うのは困難な場合が多いが、小さくとも多様な働き口を組み合わせてその地で暮らし、棚田を含めた中山間地域での地域活性化活動を実践しているＩ・Ｊターン者は、少なくない。彼らは、その地域で暮らすことを選んだ人々であり、その「思い」と移住してからの「（苦労談も含めての）遣り甲斐」について語ってもらった。コロナ禍でなかなか現地に行きにくい中、実際にその土地に移り住み暮らしている人達の生の言葉が、その一歩を決めあぐねている人への後押しとなれば、幸いである。

（棚田学会編集委員会）

棚田が好きな人が集うカフェを目指して

カフェ店長／いにぴちゅ会事務局　友松 裕希

広島県で唯一選ばれた日本の棚田百選「井仁（いに）の棚田」は、広島市から車で約 1 時間、走った山の上にある棚田です。現在は、広さ 7.9ha の棚田を、40 人程度の住人で、守り受け継いでいます。私は、この井仁の棚田に魅了され、4 年前からカフェを営んでおります。

カフェを始めるきっかけは、6 年前に勤めていた会社を辞め、「井仁の棚田」の保全と活性化をミッションとする地域おこし協力隊になったことでした。協力隊の活動は、井仁の情報発信やイベントの運営、大学との連携等が主であり、井仁で過ごすうちに、地域の課題が見えてきました。カフェができる前から、井仁へ景観を求めて多くの方が訪れていましたが、短時間滞在できる休憩所しかなく、ゆっくり棚田の景色を楽しんだり、山の幸を味わえる場所がありませんでした。その中で、井仁のファン（棚田の維持・保全に関わってくれる人）を増やすため、棚田の魅力をまるごと感じてもらえる「場」の必要性を感じました。

そこで、協力隊の任期中に、棚田を五感で楽しめ、人が集えるカフェを企画しました。カフェの実現には、地元である井仁の皆さんはもちろん、行政や有志の方々のご理解・ご協力により、2017 年 9 月に「棚田カフェ イニ ミニ マニモ」をオープンすることができました。（「イニ ミニ マニモ」は、英語圏で広まっている子供向けの数え歌。）

カフェの一番の魅力は、なんといっても、棚田の景観を楽しみながら、棚田米や地元の農家さんが作った野菜・果物を使ったランチやケーキを味わえるところです。現在 4 周年を迎え、地元の伝統料理である一合寿司（押し寿司）ランチ、旬の地元野菜を使った棚田米ランチ、米粉ピザ、季節のケーキなど、特色あるメニューを提供しています。また、2021 年には菓子工房を増設し、棚田の米粉を使った焼き菓子の販売を開始しました。カフェ本店の販売に加えて、道の駅やオンラインショップでの販売を開始し、より広く井仁を知ってもらえる機会となっています。

そして、食だけでなく、カフェを拠点に、体験型イベントも生まれました。オカリナ教室を開設し、棚田というフィールドで音楽を楽しんだり、石垣に自生するお茶の木を使って、茶摘みやお茶作りを楽しむ会などが始まり、当初の目的であった棚田を五感で楽しめる場、人々が集える場になりつつあると実感しています。

棚田は自然と人の営みが調和した場所であり、住む人や集う人もユニークな方ばかりで毎日が特別です。四季や天候によって移り変わる景色や山の恵みに感動・感謝するとともに、棚田を借りて稲作をする中で私自身、収穫の喜びや地元の方とのふれあいの大切さを感じています。ぜひ「井仁の棚田」の魅力を五感で感じに、カフェへ来てください！

一合寿司ミニランチ

田植え（5 月）直後及び稲刈り（9 月）前の井仁の棚田

小さな積み重ねから育む棚田の情景

くらしを耕す 共同代表　植田 彰弘

菜の花が広がる春の江田集落全景

徳島県名西郡神山町は徳島県中部に位置し、町面積は約 173.30km^2。町の中央を東西に横断する鮎喰川流域に農地と集落が点在します。町域の約 86％を占める 300 ～ 1,500m 級の山々が囲い幾多の谷川が形成され、谷川を水源として土地が切り開かれ急峻な棚田が形成されています。私たちが活動する集落は、鮎喰川の上流域上分地区で元禄期（一説）から続く江田の棚田となります。急峻な山間部に突如開かれた集落は 60 年程前まで約 300ha を耕作していたとされ、その大部分が水稲と聞いています。30 年前より高齢化や後継者不足、杉などの植林も重なり次第に耕作放棄地が増え、現在の作付け面積は全体で約 5ha まで減少しました。

2009 年地元農家や同町 NPO 法人が協働し耕作放棄地の増加、高齢化による農地維持問題に向き合うべく「棚田再生事業」を実施し、県内の大学生や有志を中心とした田植え・稲刈り体験を実施してきました。同時に集落としては休耕田の新たな活用を目的とした景観保全活動「江田菜の花まつり」を始めます。筆者は 2012 年に神山町へ移住し、同事業へ参画。2014 年にはメンバー 3 人と共に、田植えから稲刈りまでの生育期間中は稲の管理や集落の草刈りなど、体験活動に留まらず暮らしに身近な活動を担うことで関係性を築いていきます。

この「暮らしに身近な活動」が私の原点となりました。稲作や草刈りを通じて棚田再生に寄与していると思っていた矢先、筆者の師匠（西森傳多氏）から「美しい棚田の風景はお前たちの農業や草刈りだけじゃ守れない」というお叱りを受けました。西森さんが考える棚田の風景は、そこで暮らす一人一人の営みが重なって生まれるもの。まずは自身がこの場所で暮らし、関係性に溶け込むことで初めて風景を生む担い手になると教えてくださりました。この言葉をきっかけに 2016 年に江田集落へ住まいを構え、小さな暮らしの積み重ねを通じ景観保全に関する事業に取り組んでいます。

現在「くらしを耕す」という屋号で棚田の景観保全活動を行い、10 年目となります。本業は上分地区で公民館管理を行い、江田集落をはじめ地区全体の集落維持活動等に努めています。棚田再生事業では水稲を中心に田植えや稲刈り等の体験事業、耕作放棄地の草刈りや、茶畑や柚子の管理を担うことで集落の暮らしに向き合い小さな生業を掛け持っています。断片的な体験に留まらず、水稲では水の管理、水路の維持修復、無農薬栽培を通じて除草の在り方など作業全般に向き合ってもらうべく、この地で学んだ知恵や技術は参加者へ惜しみなく還元するように心がけています。一人一人が手間暇をかけて生み出した時間こそ棚田の記憶に語り継がれていく情景に繋がると信じ、そのためにも暮らしに直結する小さな出来事や本質的な価値に目を向けてきました。石積みの修復や水源の維持管理、荒廃した土地の改良など、私たちの世代に留まらず未来に資源を残していくことへの問いにも向き合い始めています。

日々の積み重ねから生まれる美しい価値を受け継ぎ、次世代にバトンを渡せるよう引き続き江田での暮らしを営んでいこうと思います。

写真中央 西森傳多さん、右端 筆者

上堰棚田をボランティアとともに守る

本木・早稲谷　堰と里山を守る会　浅見 彰宏

本木上堰と棚田との出会いはいくつもの偶然が重なりあったおかげだった。農的な暮らしをしたいと福島県会津地方で空き家を探したところ、山間部の築 100 年を悠に超える茅葺の古民家を借りること

ができ、千葉県から 25 年前に移住した。いわゆる I ターンだ。移住早々に借りた田んぼは 7a で 11 枚の棚田。まず自給自足を目指す素人にはおあつらえ向きな小ささで、地主が出した貸す条件は必ず本木上堰水利組合に入ることだった。

5 月になって組合の共同作業に初めて参加する。集落の中を流れる早稲谷川の上流部で取水し、深い山中を地図の等高線を描くよう地形に沿って流れる堰（水路）は豪雪地帯ゆえに冬の間は水を止める。そのため雪解け後に冬期間溜まった落ち葉や土砂をきれいに取り除かなればならない。それを水利組合員が数日かかって徹底的に浚っていく。この作業は堰が造成された 1747 年以来続いていた。田んぼに水を入れるにはとてつもない水利システムが存在していること、そして堰がこの地域の棚田の生命線であることをこの時初めて知った。

しかし組合員の顔ぶれはほとんどが高齢者で後継者が少ないことも判ってきた。このままでは人手不足で数年のうちに立ち行かなくなることは明らかだった。そこで一番人手のいる 5 月連休中の浚い作業にボランティアを呼んではどうかと組合に提案した。農村には結という相互扶助の制度が昔からあるが、全く縁のない外部の人をしかもボラで受けれるという土壌はない。ゆえに抵抗感を持つ人もいたが、先輩 I ターン者の協力もあり説得することができた。こうして 2000 年に堰さらいボランティア受入れという取り組みが始まった。

20 回目の堰浚い後の集合写真

初年度は 7 名から始まり、参加者は口コミで徐々に増え、10 年目ごろには毎年 40 名以上のボランティアが主に首都圏から来るようになった。そのほとんどはリピーターだ。一方で組合員は高齢を理由に減っていき 2007 年には組合員とボラの数は逆転した。地元では当初なぜこんな山奥に人が集まるのか不思議がっていたが、目を輝かせながら落ち葉や土砂を浚うボラの姿を見て、自分たちの地域の魅力を再認識する機会になったようだ。

田植え直後の上堰棚田を水路から望む

2005 年に受入れ体制を整えるために「本木・早稲谷 堰と里山を守る会」を立ち上げた。これを母体に棚田という資源を活かして関係人口を増やすために自然観察会や水路の生き物調査、「上堰たより」や記念誌の発行なども行ってきた。農家の収益向上も目指して「浚って応援、食べて応援、飲んで応援」をキャッチフレーズに、2009 年からは棚田米を「上堰米」として販売を開始。組合員からの買取価格は一俵 18,000 円とした。2013 年からは喜多方市内の酒蔵に純米酒「上堰米のお酒」を醸造してもらい上堰棚田のファンを増やしている。2016 年に長年耕作放棄されていた田を復田し、棚田オーナー制度を立ち上げた。2021 年 5 月には、棚田地域振興法に基づく指定棚田地域に福島県内で最初に指定され、中山間地域等直接支払制度の棚田加算金を利用して本木集落内に農産物直売所を開設した。水利組合員だけでなく地域全体にも関係人口の効果が行きわたることを目指している。

上堰棚田の米を使ったオリジナル日本酒

忘れられた北山の棚田で暮らす

株式会社 AGREL 代表取締役　奥田 薫樹

■忘れられた棚田

静岡県沼津市戸田の「北山の棚田」は、沼津市と合併する前の旧田方郡戸田村時代、平成 11 年に農林水産省が認定する日本の棚田百選に認定

された。

周囲の山々からの豊富な水源を利用して開拓された石垣の棚田であり、稲作よりも換金性の高い柑橘類への転作が進んだ昭和期から、平成期には獣害に比較的強く、さらに換金性の高いシキミへの再転作が進んでいる。令和３年の現在は棚田としての景観を保持する稲作を続けているのは私を含めて３軒だけであり、観光資源としての北山の棚田は、棚田らしさを期待して訪問する観光客にとっては、見所の少ない棚田という印象を与えるであろう。

以前は棚田のある戸田新田地区の住民、行政の協力で棚田オーナー制度が導入されたが、平成26年までにはオーナー制度は事実上消滅したという。かつては数百人だった新田の住民も現在は数十人であり、そのほとんどが高齢者である。その後、沼津市役所の有志によって耕作放棄された棚田の一部で稲作に挑戦するも、イノシシの被害によって収穫を断念。その翌年、平成28年に地域おこし協力隊としてタチバナの６次産業化と北山の棚田の保全を沼津市より委嘱された私は、現在に至るまで稲作を継続している。この約五年間の間に、北山の棚田が四百年ほどの歴史を持つ巨大な棚田（推定約15ha）であることを知ることになるが、私の最初の印象は忘れられた棚田というものだった。

水を引き入れた棚田

■この地を美しいと感じる心

協力隊の初年度から新田地区の方に弟子入りし、シキミ農家と稲作を並行して進めることにした。自身が花卉農家であった経験から除草剤・農薬の使用には抵抗がなかったが、畔作りの際に何となく除草剤を使わなかった。偶然というかその日の気分でたまたまそうしただけと記憶している。元々、機械の入らぬ形状の棚田で、手植え手刈りの稲作に加え刈払機による草刈り、電気柵と獣害ネットの展張と、手間も費用もかかる稲作だった。

水源地の堰作りや水路の管理、それに加えてイノシシ・シカの獣害は年を追うごとに酷くなり、三年目、四年目は収穫できなかった。やる気も時間も無駄に思えたが、なぜか協力隊の任期が終わっても止めようとは思わなかった。偶然なのか毎年の畦作りで見つける生き物が次第に増えていくのを実感したからである。除草剤を使わなかったせいかは判らない。始めはモクズガニが現れ、翌年にはヤゴたちが現れた。カワニナが増え、今年は初めてアカガエルが現れた。

獣害ネットで身動きできなくなったシカ

■棚田で生きるということ

協力隊の任期中から農家民宿の認可をいただき、カフェを併設して棚田を訪れる方のための施設作りを進めてきた。コロナ禍で観光・飲食での収入は諦め、介護施設での調理の副業をしながらも棚田とシキミの農作業を続けている。先のことはわからないが、稲作も民宿の改修のDIYも楽しく、気分良く暮らせるようになってきた。この春にはようやく法

人化もした。さらに出来ることを広げていきたいと思っている。

北山の棚田で開業した農家民宿「奥田」

棚田と人を繋ぐ「棚田アイス」

BEAT ICE 代表　山口 冴希

■ BEAT ICE について

はじめまして、BEAT ICE（ビートアイス）の山口冴希と申します。私たち夫婦は、神奈川県葉山町にある「上山口の棚田」でお米作りをしながら、「日本の美しい田園風景の魅力を、美味しくて体に優しいアイスと共に届けたい」という想いを胸に、お米のヴィーガンアイスクリームの製造販売を行っています。

BEAT ICE 代表 山口冴希

■棚田との出会い

2015 年の冬、私たちは幼い息子 3 人と家族 5 人で葉山町に移住してきました。ミュージシャンとして活動していた夫が心身に不調をきたし、長年携わってきた音楽の仕事を離れたことがきっかけでした。移住してまもなく、葉山町の上山口地区に残る「にほんの里 100 選」にも選ばれた、美しい棚田と出会いました。その心地いい空間に魅了され、家族で何度も足を運ぶようになりました。

そして導かれるように棚田の作業に参加する機会に恵まれ、夫婦で仲間達と一緒に農作業に励むようになりました。棚田に刻み込まれた先人の知恵、世代を越えた人と人との交流、土や水、生き物の循環を感じる空間。全てが新鮮で愛おしく、夢中で時を過ごしていました。

上山口の棚田（神奈川県葉山町）

■お米のヴィーガンアイスクリーム開発の背景

魅力あふれる棚田ですが、農作業を通して農家さんや地元の方と親しくなるにつれ、棚田は衰退の一途を辿っていて、存続の危機にあるということを知りました。高齢化や人手不足もあり、年々棚田を取り巻く環境は厳しさを増しています。

しかし、私達のように、その風景の美しさに魅せられ足を運ぶ人が多いことから、「棚田には生産性だけでは計れない価値がある。そこに魅力を感じ、想いを寄せる人たちがゆるやかに繋がれるツールがあれば、そこから新たな喜びの連鎖が広がっていくのではないか」と考えました。そんな棚田への想いを込めて、2018 年 4 月、「葉山アイス」をリリースしました。

葉山の棚田産のお米を原料とし、ノンアルコールの甘酒を製造。乳製品が苦手な人やヴィーガンの人でも口にできるよう、牛乳や卵の代わりにココナッツミルクと豆乳を使用しました。収穫量の少ない棚田米は、お米として消費するとすぐなくなってしまいますが、甘酒に加工することで、10 キロのお米から約 1,000 個のカップアイスを作ることができました。さらに 1 個あたり 10 円を棚田に還元する仕組みで、楽しく、美味しく、ゆるやかに、棚田の応援に参加することが可能になりました。

■取組の広まり

「葉山アイス」の取組は多くの方々からご賛同いただき、現在は地元のスーパー、道の駅、ふるさと納税返礼品、小学校の給食など、様々なシーンで取り扱っていただいています。

2018 年秋には「全国棚田サミット」に参加。日

本各地の棚田関係者と交流する中で、「うちの棚田米でもアイスを作れないか」と、ご相談いただくようになり、「棚田と都市、棚田と人を繋ぐ」をコンセプトに、2019 年、「日本各地の棚田アイスシリーズ」をリリース。販売開始からおよそ 2 年で、日本各地 10 地域の棚田と連携した取組に発展し、2020 年 12 月には、「第 8 回 環境省グッドライフアワード / 実行委員会特別賞「森里川海賞」を受賞。2021 年、高級の本格みりんとして知られる「三州三河みりん」とコラボレートした「DEN+EN ICE CREAM」をクラウドファンディングサービス 'Makuake' にてリリースし、アイスクリーム部門歴代購入金額 1 位を達成。同年、農にルーツを持つフランス発祥のライフスタイルブランド「AIGLE」との協業を発表し、お米や棚田の可能性の拡張を目指し、挑戦を続けています。

日本各地の棚田アイスセット

■これからの展望

棚田では、「保全」や「守ろう」という言葉がよく使われます。しかし敢えて、「守っていくには、続けていくにはどうしたらいいんだ？」という問題から一度離れてみて、「今の時代に、棚田という存在がどれだけ人に喜びを与えられるだろうか？」という問いに変換してみる。そこから生まれる小さな喜びの連鎖が、結果的に続いていくということなのでは、と感じています。

これからも、おいしいお米のヴィーガンアイスクリームをお届けしながら、棚田の魅力を日本全国、そして世界に向けて発信していきたいと思っています。

2021 年棚田学会発表会報告

研究委員長　**上野 裕治**

2021 年 12 月 4 日（土）、2021 年棚田学会発表会が開催されたのでその内容を報告します。コロナ禍による移動制限等により、棚田学会はこの 2 年間これまでとは異なる時期や形式によりシンポジウムを行ってきました。発表会については、昨年のシンポジウムを 12 月に行ったことから一昨年 12 月以来 2 年ぶりの開催となりました。直接面談して話し合う機会が少なくなり研究者の動向がつかめない中、また役員改正とも重なり、非常にタイトなスケジュールで発表者の公募を行いましたが合計 5 件の発表応募がありました。

発表会は Zoom によるオンライン開催とし、発表 20 分、質疑応答 10 分（チャットによる質疑のみ）で実施しました。各発表のタイトルと概要は以下のとおりです。

発表 1　『日本の棚田百選』20 年後の現状と課題 ― 2019 年社会調査実習の報告 ―

髙野美沙希（2020 年度立正大学文学部社会学科卒業生）、堀田恭子（立正大学文学部社会学科）

「日本の棚田百選」の選定 20 年後の現状を明らかにするために百選地区の 134 地区に対してアンケート調査を実施し、おもに次の 2 点について報告した。その結果、①百選の棚田においても、オーナー制度の導入は半数以下で、導入している棚田でも継続が難しいところが多いこと、②地元で重視している多面的機能では「景観形成保護」「国土の保全」が上位を占めたこと、が分かった。

発表 2　多様な主体による棚田保全のあり方について

伊藤優花（常葉大学社会環境学部社会環境学科 4 年）

静岡県松崎町石部地区では、2002 年から静岡県で初めて棚田オーナー制度を導入し、現在 109 組のオーナーを有する比較的大規模な棚田保全活動を実施してきた。また、「1 社 1 村しずおか運動」も行い、支援に広がりを見せている。しかし現在、棚田地域における人口減少や少子高齢化が進行し、棚田が荒廃の危機に直面している。本研究では、多様な主体が参画する棚田保全のあり方を明らかにすることを通じて、石部棚田の維持管理のために、より多様な外部の協力者が参画するしくみを提案した。

発表 3　コロナ禍での棚田オーナー制度の実施状況について

山村哲史（京都大学大学院農学研究科　修士 2 回生）

棚田オーナー制度は農地の保全や地域外の方々との交流を目的に多くの地域で取り組まれている。しかし新型コロナで人の移動が制限され、多くの地域で活動に影響が出ている。本調査は全国 101 カ所

をリストアップして、2021年3月にメールと郵送によるアンケート形式で活動状況を尋ねた。その結果、95地区から回答をいただき、全体の7割の地域で目立った影響があったことが分かった。

発表4　中山間地域に住む中学生の描く地域の未来図と未来を考えることによる意識変化

野田紗由（三重大学生物資源学部共生環境学科4年）、岡島賢治（三重大学大学院生物資源学研究科）

Society5.0の社会革新の恩恵を最も受ける中山間地域に住む若者たちは、その未来を考える機会を持っていない。そこで未来を考えるための積極的な働きかけとして、神木、坂本などの棚田地域を校区に持つ三重県御浜町御浜中学の2年生にその地域の未来図を描いてもらう活動を行った。その活動の前後にアンケート調査を行い、若者たちの将来への意識の変化を分析した。その結果、絵画を通じた未来への思考の展開は、中山間地域に住み続ける意思をはぐくむ効果があることを示した。

発表5　AIを利用した豪雨による傾斜農地の土砂崩壊実態と災害予測マップ作成

岡島賢治（三重大学大学院生物資源学研究科）

平成30年7月豪雨で発生した愛媛県宇和島市吉田町付近の土砂崩壊の地形的特徴を表現しうる災害予測マップを作成するために、GISによる地形解析項目データをもとに、機械学習の一つであるニューラルネットワークを構築した。その結果、適用する地形解析項目数が多いほど正答率の高い災害予測マップを作成することができるが、崩壊地の地形的特徴を再現するためには適切な地形解析項目を選択する必要があることが分かった。

以上5件の発表の後、菊地稚奈研究委員の司会進行により発表者同士のディスカッション（30分）を行いました。前半4件の発表が若手の発表で、しかも棚田保全に関わる現状や存続に関わる発表であったことから、お互いの発表への感想や活発な討論が行われました。

最後に研究委員長上野が以下のように総括しました。

発表会を初めてオンライン方式で行いましたが、コロナ禍によりこの数年、様々な会議、シンポジウム等がオンラインで行われるようになり、多くの人々がその環境に慣れてきたと思われ、本発表会もなんとかスムースに進行できたように感じました。

棚田百選選定から20年が経過し、棚田の現状や課題も各方面で議論されるようになってきたものの、相変わらず棚田の減少に歯止めが掛からず課題も多い状況です。また棚田地域進行法も施行されましたが、まだその効果が見えてきていないように思えます。今回の発表では全国的な棚田やオーナー制度の現状（高野、山村）とともに、各論として個別の棚田における先進的な取り組み（伊藤、野田）も紹介されました。5件目の発表（岡島）では、AIを利用した先進的な災害予想への試みが示され、防災だけでは無く様々な棚田に関する情報への応用など、棚田のスマート化への可能性が示唆されました。

今後の課題としては、シンポジウムや発表会のオンライン開催の標準化、まだまだオンラインに慣れていない会員への対応（例えば声を出しての質疑など）について研究する必要があると思われます。研究委員会としましては、オンラインを含めた新たな研究発表、情報収集、見学会のあり方などについて議論していきたいと考えています。

事務局ニュース

■第18回石井進記念棚田学会賞候補者募集

・自薦他薦を問いませんので、奮ってご応募ください。締め切りは令和4年3月31日です。応募方法は棚田学会ホームページをご覧ください。

http://tanadagakkai.main.jp/index.html

■農林水産省の「つなぐ棚田遺産オフィシャルサポーター」に登録されました。

https://www.maff.go.jp/j/nousin/tanada/tanada_supporter.html

■棚田学会のロゴを募集します

棚田学会はこれまで「ロゴ」を持っておりませんでしたが、このたび制定することといたしました。現在「つなぐ棚田遺産」オフィシャルサポーターのページに掲載されているものは暫定的なものです。

近々に募集要項を決定し、応募方法を学会ホームページに掲載しますので、内容をご確認の上、奮ってご応募ください。

棚田学会通信　第66号　　2022年2月8日発行
発行 / 棚田学会
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院　高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572　FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagakkai@gmail.com